

香 蘭

香 蘭

2019年(令和元年)7月号
桜井京子歌集『超高層の憂鬱』批評特集
第96巻 第7号 通巻1063号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(47)	伊藤(美)・石井・西野・伊藤(康)・大井田・齋藤俊子	表二
作品一特選(七月号)	高島・坪倉・土井・城	2
作品二・三特選(五月号)	鈴木(知)・江口・松沢・牧田・青山(信)・杉山(伊)・高田・平川・武藤・渡邊(典)・小林(純)・庄司・関(哲)	4
推薦香蘭集	森田久幸	25
歌の生まれる場所(78)	千々和久幸	44
村野次郎への旅(112)	酒井佐忠	52
千々和久幸代表が日本短歌雑誌連盟「特別功労賞」を受賞	風間博夫	24
転載 毎日新聞5月20日付歌壇・俳壇面(詩歌の森へ)	藤原龍一郎(34)・山野吾郎(36)・松尾祥子(38)	34
転載 坪裕歌集「祭り太鼓はにぎやかに」評	鈴木桂子(40)・田端明(42)	33
桜井京子歌集『超高層の憂鬱』批評特集	丸山三枝子	22
転載 「進路」七首、エッセイ	千々和久幸	20
焦点(五月号) 副詞を活かす	香蘭集	19
作品一特選欄評(五月号)	香蘭集	53
作品二	香蘭集	52
作品三	香蘭集	44
緑地帯	伊藤(美)・宮口・唐沢・高橋・登喜	66
七首抄(五月号)	萩尾・唐沢・川久保・市川	66
明宝研究会第一〇六回四月例会	渡辺・狼田・馬場	64
文法あれこれ(2)	田端明	62
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き	石井雅子	60
他誌拜見 104	石井雅子	58
歌会及び会合・会員消息・他	石井雅子	51
編集後記・新宿日記	石井雅子	84
表紙絵……中村陽子「鏡を置けば」	和田和雄	82
目次カット	和田和雄	80
	和田和雄	78
	和田和雄	74
	和田和雄	73
	和田和雄	70
	和田和雄	68
	和田和雄	66
	和田和雄	64
	和田和雄	62
	和田和雄	60
	和田和雄	58
	和田和雄	51



2019年(令和元年)7月号

桜井京子歌集『超高層の憂鬱』批評特集

第96巻 第7号 通巻1063号

斎藤俊子

山葵田を走る真清水くれなゐの沢蟹いでて

かげろひにけり

『檀風集』

昭和九年「上流地帯」と題する一連六首の中の四首目。先生四十歳の時の作品。
涌き出る清水に育つ山葵と沢蟹が詠われ、いつ読んでも爽やかな風の流れと懐かしい思いが呼び起こされる。季節は春から初夏の頃でしようか。生き生きと詠われている沢蟹の動きと共に、蟹の色と山葵のみどりの色彩も新鮮で、清水の流れる音まで聞こえてくるような清々しさである。
他にも蛙や蛇、かたつむり、蝶、こおろぎ、蟬などが詠われ、先生の小動物へのやさしい眼差しに心打たれる。同時期の作品に「耳ちかくつくつく法師蟬鳴きたちて溜れるわれの為事をせかす」がある。

次の年の六月、白秋は「多磨」を創刊する。「香蘭」は合議制を解き村野次郎主宰の香蘭となる。歌と共に香蘭の最初の頃が憶はれる。

(短歌新聞社文庫『檀風集』37頁、『次郎三百首』には収録されていない)

四 選 者 の 作 品

アルバム 平塚 千々和 久幸

見ることはないが古いアルバムは生きている限り整理はしない
いま一人の俺が傍らに生きているからいとおしめとアルバムが言う
父方の祖先と姓の違うこと妹に問われはじめて気付く
一族の系図にまったく興味なき父なればわれは何処へでも飛ぶ
父も母も古きアルバムの中にいるわたしがわたしになる以前から
貧相な藤の花よと見て通る四月十日の路地に咲けるを
鱈寿司は天津が一番と四合瓶添え駅頭に手渡しくれぬ
酒の味が変わるぞなどとも言い添えて改札口の方へ消えたり

藤の花房 鎌倉 香山 静子

倉敷川に沿へる柳はいつせいに淡き緑の葉をゆらすなり
倉敷川のほとりゆきつつ思ふなり会ふ人たちの言葉やさしと
柿・椿・木蓮の葉はそれぞれに異なるみどりを見せてゆれるる
おみやげはどこのお店も「きびダンゴ」そうです。ここは吉備路でした
みどり色の炎となりて立ち尽くす古きみ寺の楠の大樹は
人影の見えぬ春の砂丘に風の彫りたる一筋の傷

むらさきの滝とも見えて山際に連らなりて咲ける藤の花房

「平成の最後の日」といふ言葉をテレビは流す日に幾たびも

母の欲 我孫子 丸山 三枝子

令和元年五月十日はわが母の誕生日なり九十三歳

食卓の一汁一菜シンプルは涼しくもあるか母に夏くる

食欲の失せたる母に耳目の欲ありて集える土曜日の会

夏旅のショルダーバッグのポケットに入れてきたのさ単4電池

肌身はなさず持ち歩くこの辞書を瞬時に生かす単4電池

やさしさはせつなきものか初夏の風にそよげる櫛のみどり

落ちいたる花びら捨てて窓ぎわに寝そべる犬にただいまと言う

あきらめず開き直らず詠むとうをわがごとく聞き掃りきたりぬ

夕雲 東京 桜井 京子

朝寝坊したいわたしの窓近くきみが如雨露でみづかけてみる
あさなな小さな林檎を切り分ける年金暮しに障りのあらず
街角にミモザが咲いてきさらぎの風の尻つぼがゆれてゐるなり
すがすがと仲間はずれになつた日よ頭上に冷たきさくら降りくる
あのころは多忙だつたと夕雲をみてゐるならむ百年のちは
潰してもつぶしてもわたしの中にある鬱といふ虫すがたを見せよ
傍らに置きたるはずをクリップが消えてしまつて永久にかへらず
新任の短歌の先生バスを降り鹿骨通りをわたつてゆけり

作品一特選



(七月号作品、五選者共選)

とり残されて 川崎 伊藤 美恵子

茶葉多く入れて煮出したミルクティー インドの朝の濃さを思えり
思い立ち真夜中ベッドで買物すアマゾンわれの敵か味方か
ジーニアス英和辞典をほいと捨てるなんの未練もないふりをして
待みたる医師の見立てに夫もわれも言葉少なくうなずいている
車椅子になるやもしれぬと告げられし人のおもいを黙ってつつむ
ふたりして歩いた大和の山の辺の道にわたしはとり残されて
バスに乗り電車に乗ったと告げれば医師にほめられ子に叱られる
さんたんたる鯨鯨 習志野 石井 雅子
村野師は平明なるに四郎作「さんたんたる鯨鯨」は無残な詩なり
安倍の「安」がつく字ちやなくて良かったと元号決まりたる後に思ひし
ただ生きるだけで大変なる夫を見てゐるわれも大変となる

夜の電車 川崎 大井田 啓子

抱かれたる児も吊り革を持たされて夜の電車はひた走るなり
ささらぎの陽のさす座席渋滞といふランプのほのほの樂し
曇天のますます低し向かひ家の屋根がわづかに尖つてきたり
遠目には今盛りなる白梅の世界を揺らす風のあるべし
すずらん皮膚科過ぎてひまはり眼科あり今日は桜を見に行くのです
西口より入り慣れたるスパーの正面に来て戸惑つてをり
信号の変らぬうちに誰かひとり足踏み出せばわれらの足も
春なり 鎌倉 高島 憲子

早春の衣張山の山すそに生ふる野芹のいぶきを摘めり
はるなりと読みますと言ふ「春成」の名札を付けしレジの女子
葉桜の窓辺に眠るをさな子を起こさぬやうに皿洗ひをり
父用の膝の薬と孫用の粉ミルクとがわが籠にあり

たまさかの一人の午後なりインターホン取れば微かに風の音する
幼子はわれの背後に笑ひかく春の座敷に誰も居らざる

古き一首に ふじみ野 坪倉 寛

ラーメンの汁は飲むの御宣託それまでにする価値ある生や
追はると言ふより目白が付度し梅の枝には鶉が居座る
丁丁壮丁装丁丁稚符丁落丁丁鬻丁抹丁幾

千葉なんてハイキングにゆくとこたぜ 東京の田舎者はすぐにさう言ふ
帰り来てストッキングを脱ぐときに蛇の脱皮を思ひつつ脱ぐ
ほんやりと来ない電車を待つてみた野球少年自死せしホームに
時代劇ばかり観てゐる夫ゆゑに「かたじけない」と礼を言はるる

土瓶敷き 東京 西野 美智代

抜け道にいつも利用のこのホテルけふは招かれ宴席に座す
詠草を出さんとしたる手揚げより疾く帰れとや土瓶敷出づ
綺麗事のみにはゆかぬ間柄 逃げは忽ちよき姑になる

道端に夜つびて照明浴び続け生育不良となる小松菜

栄誉賞を二度否めるイチローの心意気こそあつばれならん
体力の衰へたるを託ちつつ夫が通販のベルトを買へり

いたづきを養へる身の真ん中にずしんと響く歌評がありぬ

笑 顔 東京 伊藤 康子

ちよつびりの笑顔でアリガトゴザイマス グエンさんのいるコンビニが好き
レジ脇のおでんに替わりチョコ並ぶ頃にはグエンさんはいなかつた
標本木の開花に一輪足りませんスマホ構える人垣ゆれる

造花にて飾らるる貸しスペースでゆっくりおしゃべりインドア花見

求人誌の高齢者特集のページの老眼鏡かけじつくりと見る
駅前の自転車置き場に新車増えオンポロ愛車は隅っこに置く
ラーメンの無敵屋の前の行列は歌会の後も跡切れることなし

西澤選者じつは在すかこの部屋は一度たづねし昔日のまま
見慣れたる赤ペン無言に無造作に転がりてゐる辞書のかたへに
蔵書もらふためにと来しがこ子息と話はづみて時すぎにけり
「俗名を彫りし詩人の一基あり…」西澤みづぎの古き一首に
さくらは瘦せる 東京 土井 紘二郎

気のせいとはかりは言はず年々に石神井川のさくらは瘦せる
生垣をこえて散りたる紅の椿はなほも息あることし

アマリリスゆつたりひらく春の宵白き大輪あたりをほらふ
握手して別れきたればわが務め終へて独りの気楽さにある

イチローに受賞拒否され会見の官房長官さまりのわるし

人がみなわれよりえらく見ゆる日にわれに手を振り選挙カー過ぐ
考へず飲みはじめたる熱燗が二杯目となる それいけカーブ

電と副へ虹 豊中 城 富貴美

新元号聞きて戦後の粗悪紙の茶色になりし「万葉集」出す
大事故に夫が遺ひにし万愚節思ひ出しつつ「令和」聞きたり
平成の置きみやげかな新元号決まりたる日の電と副へ虹

吹雪来るさくら花びら生け垣の赤芽柏をあはくそめゆく

次つぎに身にふりかかる花びらが化粧の上着を滑りゆきたり
池の面に影をうつして飛びきたる鳥はおのづと影におりくる

伸びきつたままのリードに犬を連れ少女の駆ける葉桜の道

作品二、三特選



(五月号作品から) 渡辺 礼比子 選

《作品二》

紅白の梅 笛吹 鈴木 知良

夕づけば御坂山脈かけり来ていろ深みたり装の幾すぢ

聳えたる鳳凰三山雪ごとに山は覆はれ銀色放つ

庭池の全面凍結睡蓮を閉ちこめ今日より大寒に入る

鐘楼を囲むがに咲く紅白の梅馥郁と昼を明かるむ

木蓮の花芽するどく群らがりて雨降るなかに開かんとする

・自然の変化をダイナミックに捉え、迫力満点。

ささらぎの雪 柏 江口 絹代

勤め人を辞めたる夫は車庫にある電車のように止まったままだ

はるがすみたなびく空に浮島のごとく浮かべる筑波山見ゆ

ささらぎの心もとなき細雪国道の上の陸橋に降る

あかときの原より聞こゆる雉の声手賀沼あたりに春が来ている

かたくなな桜の苔にふりかかる春の雪なり寡黙に降れよ

・ユニークな比喩の歌も、心象を投影した自然詠も魅力的。

制 服 さいたま 松沢 みどり

派遣社員の我のみ制服あらずして今月までの私服通勤

通達のメールが皆に届きたりわれが社員に採用された

膝丈のスカート履くのは久しぶりサポータータイツを二足買い足す

制服を試着し鏡の前に立つ制服を着たわたしが映る

頑張ったことも諦めていることも過ぎれば同じ過去形になる

・緊張感に満ちた日々が生き生きと描かれている。

冬の雨 藤沢 牧田 明子

親しき友の家。移り送りて一人来し川は深々冬をまとへり

ころろなし雨降るやうな空模様友は引つ越しの荷を解きぬむ

この道にわれを呼び止める友のなく雨戸はぐるりと閉ぢられてゐる

冬の雨降りたるのちは透きとほる外気に庭の洗はれてをり

・寂寥感が抑制の効いたトーンで詠まれている。

すでに春 米子 青山 侑市

トビの舞ふ雲間の青はすでに春 帽子片手にしばし見上ぐる

堀川の遊覧船に雪は散り岸辺にサギは身じろぎもせず

寒空に木蓮の蕾膨らむを日ごとに愛でて春を待ちをり

頂きにすこしの雲を遊ばせて雪の大山夕日に対ふ

・点景の人、鳥などを効果的に配し、絵画的な趣がある。

光の春 横浜 杉山 伊都子

逝きしひとに手紙を書きて春寒し丘のむかうに灯がともり初む

子犬ねむる部屋の花桃いろ見えて光の春を呼ぶ二月尽

断捨離のためとひひなをとり出だす星になれよと頬にふれつつ

あきらめないこの一ときも大事にて白玉椿ひらくを待てり

・横細に景を描写し哀感を滲ませる。

麻生 節 鎌倉 高田 みちゑ

俯向きて他人の作りし原稿を読む大臣なら誰もつとまる

けふは曇り足腰冷やさず湿布貼り薬忘れず ああ日は暮れぬ

大き荷を持ちたる人に譲られしバスの席にて身の置き所なく

花の香は届けられずといちめんの実家の水仙写メールで来る

・知的に造形された骨太の歌。

春 愛媛 平川 良枝

無作為に投げ入れられし波除けに規則正しく波音のする

寒風に耐えて伸びる雑草を替めてはならぬ玉葱畑に

生きてます今日もはちばちやりますと早朝コールを忘れない母

お知らせの通り電気が止まりたる冬のまま昼間することのなし

・日常の断片が滋味深く描かれている。

玩具とケータイ 東京 武藤 昭彦

歌という玩具に捉まり啄木の三倍ほどの時間過ぎゆく

加齢とは言わねど感じやすくなりドラマに泣いたり手を叩いたり

さよならの途端にケータイ取り出だし誰と話すか「もうすぐ行くよ」

白き脛見せてまちなか闊歩せよパンツルックはもう見たくない
・機知に富んだ一首目、詩語の効いた三首目に注目。

《作品三》 白 梅 鎌倉 渡邊 典子

国言葉もたぬわれなれ祖母の声を恋ひゆく小江戸みじか日

冬空の青のふかきを差して立つクレイン一基は吾に応答へず

黄の色は春のしたしさ房総より届きしなのはな陽のほひして

白梅の枝を洩れくるいくすちの光は土にしみてうるほふ

・声調がよく、しみじみとした情感がある。

道祖神 横浜 小林 純子

耐へてゐたあくび五六個ドトールで露にさるる疲れいくつか

相抱く腕は石なり道祖神水久を誓ふはげに恐ろしき

・切取りのよい二首目、下句の飛躍に姿みがある。

飛行機雲 横浜 庄司 健造

街路樹の冬芽ふくらむ坂道を二十歳の振袖のほりてゆけり

二すじの飛行機雲はうすれゆき紅梅におう青空のあり

・伸びやかな詩情が心地よい。

夕の参道 大分 関 哲行

わが体の隠れた場所にも傷あるか眼鏡のレンズに傷あるように

寒風に吹かれつつ咲く水仙の花の強さのいずこより湧く

・ユニークな物の見方、感じ方が良い。

村野次郎への旅 (112)

「地上巡禮」と次郎 (五)

千々和 久幸

「地上巡禮」第一巻第四號は、大正三年(1914年)十二月一日に発刊された。本誌は五十頁、巻末の広告が十頁。広告は北原白秋の「印度更紗」第參輯「真珠抄」、正覺坊虐殺、同第貳輯「白金の獨樂」の他に「雲母集」や「思ひ出」「桐の花」「東京景物詩」、さらに「國民文學」「水邊」の広告も掲載されている。

目次を覗くと室生犀星の詩「唾」が巻頭にあり、次いで萩原朔太郎の詩「夜の酒場」他二篇、吉川惣一郎の詩「假面のうへの草」他一篇が続く。次いで散文の頁を挟んで短歌は二五頁から。河野慎吾「掌中種子」十首、四人置いて村野次郎「大提灯」十首が続く。

白秋の短歌は巻末に「連」十一首、「赤硝子」十一首が掲載されている。

村野先生の十首は次のごとくである。

- ①もろこし畑に日はとつぷりと暮れて落つ大なる提灯はつと現れ
- ②真紅なる大提灯のみ動き居りもろこし畑に人はあらなく
- ③浪ひとつたてず入江のとろめければわがころ深くおそれけり秋
- ④棕櫚の葉の陽に洋刀をふるごときいまひとときの赤き夕ぐれ
- ⑤山と山せまる間の曼珠沙華ふと目に入れば驚き走る
- ⑥からたち垣蟲は鴉にさされけり今風もなき赤き外面に
- ⑦いつしらずかたはらに兄泳ぎ居り兄の暖みを感じるあはれ
- ⑧頭あげてまほしき夕日ながめたり海の眞只中にわれ頭あげ
- ⑨さ夜深く極まり涙り大いなる芭蕉葉さくる思なりけり

⑩久方の空の子杉立ちたれば馬野を越えて返り来らしも (いずれも原文のまま)

いずれの作品も平明な詠い口になっているが、⑤以外の作品は思い出せない。⑧の作品は歌集「夕あかり」所収のもので、「次郎三百首」にも収録されている。

⑧については、今回も「香蘭」七十周年記念特集号(平成5年3月号)に掲載された神山裕一顧問の「夕あかり」鑑賞に教えられるところが多かった。煩を厭わず左記に引いておこう。

これも大正三年の作であるがこの歌になると、白秋の次の歌集「雲母集」の影響を見ることが出来る。「雲母集」は大正四年八月の発行であるが、白秋は大正二年に居を三浦半島の三崎に移して巡礼詩社を創立し、雑誌「地上巡礼」を発行している。三崎の歌をその誌上で既に次郎は知っていた筈である。

海亀息吹きにけり」のような歌がある。人間と亀との違いはあるが、次郎の「頭あげて」の歌からおのずと白秋の歌が連想される。

次郎は多摩川の近くで育ったから少年の頃から水泳は習ったであろう。海の真只中で海中から頭をあげて、あたりを見まわしたとき、夕日はまぶしく輝いていた。頭をあげたとき別世界にでも来たような感じがしたのである。壮快感と恍惚感に満ちた歌である。

なお「まほし」は「まぶし」というのが普通であるが、「まほし」は江戸弁で、徳川期の戯作にも出てくるなまりである。次郎は府中の生まれで純粋の江戸っ子とはいいがたいが、後年まで日常会話の中には江戸っ子弁がよく出てきた。例えば、私たち弟子が歌を見てもらうとき、少し疑った速まわしの表現などすると、「ここはつうつと、おっべしちゃう方がいいんだよ」といった具合である。

歌舞伎や落語も好きだったし、家ではいつも和服に角帯をしめ、白足袋をはいていた。

ここまで詳しく解説されるともう脱帽で、わたしには付け加える何物もない。先達の懇切丁寧な鑑賞をただ感嘆し拝聴するだけであ

る。それにしても同時代を生きた師弟の近しさ濃密さを感じ、作品鑑賞の何たるかを思い知らされたことだった。

こういう行き届いた鑑賞を目にすると、横っちょから飛び出してきたような自身の薄っぺらな鑑賞が恥ずかしくなる。本来なら先生と同時代の眼で読まなければ、眞の鑑賞とは言えない。わたしの鑑賞は、あくまで「いまここに」の側面からのものに過ぎない。

先を急ごう。①、②の歌では「大提灯」が目目である。背後にある「もろこし畑」はどこにもある、ありふれた光景だろうから一首の中では副次的なもので、主役はあくまで「大提灯」である。

しかしこの「大提灯」は⑧のように、先生が先蹤作品に触発されて一首に歌い留めた、というのではなからう。⑧の作品における「頭あげ」は神山説によれば、白秋の「雲母集」の「海亀」からの連想であった。

しかし①、②の「大提灯」は閃き(アイディア)や連想からではなく、突如現出した眼前の風景の衝撃がもたらしたものであろう。常の日には見馴れている「もろこし畑」の日がとつぷりと暮れた後、その暗闇から真紅の「大

提灯」がいきなりぬつと出現したのである。その光景はこれまでに見たこともないほど異様で、怪しげな雰囲気を漂わせていたのだった。

その瞬時の驚きに先生の詩的な感動があった。あえて言うなら、①の結句の「はつと現れ」が実景を詩にした(起ち上がらせた)と言うべきか。

②はその瞬時の驚きが去ったあとの光景を今度は散文的に展開したものである。瞬時の驚きが去り、我に帰ってあたりをよく観察すると、闇の中には「真紅なる大提灯」だけが揺れており、「もろこし畑」に人影がなかったというのである。

ああ今この光景を目の当たりにしているのは自分だけだ、それにしても今時分こんなところに「大提灯」が現出するのはなぜ何のためか、という疑問も残ったに違いない。

この疑問には、実はわたしも答えることが出来ない。これが先程来述べている、「いまここ」は語る(鑑賞する)ことが出来ても、作者(先生)がそこにいた時代(大正三年)の「もろこし畑」と「大提灯」の事情にまで想像力が届かないからである。